

2010. 1. 3

(第3種郵便物認可)

医師不足に直面する西脇市で、市立西脇病院に来る研修医らを、市を挙げて歓迎し、面倒を見る「まるごと西脇研修制度」がスタートする。開業医による技術指導や、住民との交流会などをプログラム。激務が続く若手医師を精神的に支え、将来の赴任先に選んでもらおうという考えだ。専門家も「医師と患者の相互理解が進む。全国的にも先駆的事例」と評価している。

(篠原佳也)

若手医師歓待 まちフル動員

西脇病院の常勤医は、前期研修医3人を除き38人。国の新臨床研修制度が始まった2004年から11人減った。これに、危機感を抱いた母親らが「西脇小児医療を守る会」を結成するなど、地域医療を守る活動が相次いでいる。

西脇市で研修医支援の新制度

西脇の研修制度もその活動の一環。病院では大きな戦力となっているが、数年後には大学病院などに帰る研修医に着目。構想では、開業医の診療見学や守る会の勉強会への参加など、多彩な研修メニューを提供するほか、市民との食事会、ホームステイ先の紹介などで地域住民との交流を促進。休日には、播州織、播州毛鉤などの観光地を案内し、愛着を高めてもらう。

地域医療に詳しい伊関友伸・城西大経営学部准教授の話「全国的にも珍しく、今後主流になる取り組みだ。医師不足の原因の一つに、医師と患者のコミュニケーション不足があるが、医師が診察室の外で、住民と交流する意義は大きい。特に社会経験のない初期研修医にはよい経験となるだろう。」

具体的内容は、同市と病院側、開業医、市民らで協議し、今年春にも実行に移すという。

同病院で研修する鈴木琢真さん(28)は「病院選択の時に地方というだけで不利になるが、この試みは、地域医療を志す若手医師への大きな武器になると話し、大洞慶郎院長も「まちぐるみの病院支援。ありがたい活動だ」と歓迎する。

提案者で開業医の富原均医師(59)は「研修前の学生も対象に加えるなど、『医師を大切にす西脇』をアピールし、医師の増員につながる」としている。

「赴任先に」と売り込み



先輩医師が見守る中、手術する研修医(右) 西脇市下戸田、市立西脇病院